

財界人たちの政治とアジア主義

——村田省蔵・藤山愛一郎・水野成夫——

松 浦 正 孝

はじめに

- 一 村田省蔵（二八七八～一九五七）と実業アジア主義
  - 二 藤山愛一郎（一八九七～一九八五）と選良アジア主義
  - 三 水野成夫（二八九九～一九七二）と浪漫アジア主義
- おわりに

はじめに

従来の政治史において、財界が政治に対して大きな影響を与えて来たことについて、具体的に論じられることはほとんどなかった。しかし財界と政権との関係に注目して整理すると、様々なことがわかる。例えば、第一次世界大戦の前後から財界出身の政治家が入閣する事例が増え、五・一五事件によって政党内閣が命脈を絶たれてから戦

後初期の第一次吉田茂内閣まで、衆議院に議席を持たない財界出身者が入閣する枠があった。また、戦後政党が本格的に再始動してからも、「一九六〇年体制」の始まる前の岸信介内閣までは、事実上財界を代表する政治家が議席をもたないままで入閣していた。<sup>(1)</sup>とすれば、これまでの政治史に、もう少し財界人の名前の入った歴史を加筆しても良いのではないだろうか。

本稿における財界とは、資本主義や経済システムの確立・維持・発展などに関わり政治権力と関係を持つ、経済界における権力核のことを指す。その実態は、渋沢栄一を始めとする財界世話業(和田豊治、郷誠之助、井上準之助、池田成彬、結城豊太郎ら)を中心に明治以降次第に形成され、第一次世界大戦後に確立されていた人的ネットワークである。それは、戦時体制の中で姿を変え、戦後の財閥解体、公職追放、世代交代や独占禁止法制定などと共に再編され、新たな政治経済システムの下に組み込まれていった。<sup>(2)</sup>

いわゆる「一九五五年体制」を経て「一九六〇年体制」に至る初期の戦後政治を織り成した吉田茂派と反吉田派(鳩山一郎、岸信介ら)は、それぞれに有力な財界人を閥閥・支援者として擁し、そのことが戦後の政治経済構想と深い関わりを持っていった。吉田や吉田派を支えたのは、池田成彬、宮島清次郎ら戦前から活躍した大物財界人を始め、九州炭鉱王の家に生まれ吉田の娘和子と結婚した麻生多賀吉、宮島の後継者である桜田武、小林中、永野重雄、水野成夫らいわゆる「財界四天王」らである。彼らは、金融や鉄道、紡績など従来型の産業出身者が多く、第三次吉田内閣に厚生大臣として入閣した和菓子店の老舗虎屋の店主黒川武雄に見られるように、<sup>(3)</sup>比較的ドメスティックな問題関心を持って政治に関心を寄せた者が多いように思われる。

一方、反吉田派陣営について見ると、例えば、長女安子が鳩山一郎の長男威一郎と結婚したために鳩山を支援した石橋正二郎のブリヂストンは、戦前から満洲・朝鮮・台湾・青島・上海・タイに工場を建設、戦時中はジャワ・スマトラの米蘭系接収工場を委託経営し、航空機関連工業にも進出するなど、植民地当局と提携して「大東亜共栄

「圏」域内で飛躍的に発展したグローバル企業である。<sup>(4)</sup> 岸信介を支援した藤山愛一郎の大日本製糖は台湾やジャワなどに進出し、藤山は戦時中、中国にも華人資本との合弁会社を作った。<sup>(5)</sup> 同じく岸を支援した永野護は、鉱業界や鉄鋼業界と強いつながりを持ち、戦後フリーピンやインドネシアなどとの戦後賠償問題に積極的に関わった。河野一郎を支援した河合良成は、番町会事件で投獄され無罪判決を受けた後、満洲に渡って満洲国総務庁顧問となった。そして小松トラクターの満洲進出手伝ったことが縁となつて一九四七年に小松製作所（後のコマツ）社長に就任、東南アジアへの戦後賠償のため建設機械を輸出して、重機メーカーであるコマツがグローバル企業となる礎を築いた。河合は、第一次吉田内閣で厚相となり、五二年の総選挙でも吉田の勧めによって出馬し当選したが、吉田とはその後疎隔し、満洲時代の人脈や経歴などもあつて、反吉田の鳩山派の金庫を支えた。<sup>(6)</sup> 同じく河野一郎や大野伴陸を支援した高碓達之助は、東洋製缶支配人として北洋漁業に関わり、その後満洲重工業総裁となった。<sup>(7)</sup> このように、反吉田陣営には、「大東亜共栄圏」や大日本帝国の外縁・周縁部でのビジネス経験を持った財界人が多い。また後述するように、岸の支援者であつた藤山愛一郎や経済団体連合会副会長だつた植村甲午郎、同会長だつた石川一郎らは、統制経済・計画経済に親和的であつた。これも、自由経済論者が多かつた吉田陣営との違いである。

本稿は、村田省蔵、藤山愛一郎、水野成夫という三人の重要な財界人を取り上げ、彼らの戦前から戦後にかけての足跡の交錯をたどり、それを通じて財界と戦後政治との関わりを新たな角度から照射することを、第一の目的とする。そのうち村田については、別稿で詳細に分析を加えるため、<sup>(8)</sup> 本稿では簡単に扱う。三人の財界人たちの政治的位置づけは、それぞれ大きく異なるが、戦前から戦後にかけて大きく変化したことにおいては共通である。三者三様の軌跡の変遷は、戦前と戦後との断絶性・連続性について理解する興味深い材料を提供してくれる。

村田省蔵は、戦前は海運における戦時体制確立のため海運自治連盟を結成して理事長に就任し、一方で、日本を「大東亜戦争」に導いた大アジア主義の旗振り役として活躍した。第二次近衛文麿内閣では逓信大臣兼鉄道大臣と

して入閣し、東条英機内閣が成立すると東条首相の求めに応じてフィリピンの陸軍第一四軍最高顧問に就任、引き続き初代フィリピン大使になった。敗戦後はA級戦犯容疑者として巣鴨拘置所に収監されている。ところがその後、村田は日本国際貿易促進協会の初代理事長となつて、共産中国との国交回復に尽力した。なお村田は、吉田茂とは政治的立場が異なつても、吉田に率直にそれを進言する関係であつた。

藤山愛一郎の場合は、戦前は藤山雷太元日本商工会議所会頭の長男、結城豊太郎元日本銀行総裁の女婿として財界を担うプリンスたるべく期待された。日中戦争勃発前には、林銑十郎内閣の佐藤和協外交が送つた兒玉訪中経済使節団の最年少メンバーとして、岳父結城蔵相から孔祥熙行政院副院長・王寵惠外交部長に宛てた経済提携による戦争抑止へのメッセージを伝達するなど、財界による戦争反対の動きに深く関わつた。しかるに敗戦後は、財界内で嫌悪されていた「戦犯岸」を独り支援し、反吉田茂陣営の財界人として活躍、岸内閣成立にあたっては財界の地位を擲つて外務大臣に就任し、日米安全保障条約改定や日米地位協定締結などにあたつた。その後は自民党内で非主流派の立場となり総裁選に三度出馬するなどする一方、日中国交回復議員連盟を結成し、日本国際貿易促進協会の第四代会長にも就任し、日中国交回復を推進した。

水野成夫の戦前は、日本共産党の闘士であつた。上海のコミンテルン極東事務局に、日本共産党を代表して参加している。その後獄中で転向し、友人南喜一と始めた大日本再生製紙株式会社が国策パルプによつて出資・設立された関係で、国策パルプの社長でもあつた宮島清次郎日清紡社長の知遇を得た。宮島と吉田茂との関係から、次第に吉田や池田勇人らの信頼を得るようになった水野は、その後「財界四天王」として財界内で活躍するようになった。共産党での経験を買われて主に労働問題において活動し、富士テレビや産経新聞社の設立に関わるなど、反共の闘士として活動する一方で、中国や東南アジアとも交流を進めようとしていたという。

三人の来歴は、劇的で、傍から見ると左右に激しく揺れ動いたように見える。しかし、彼ら自身は一貫した生き

方を歩んだと考えていたはずである。むしろ彼らから見れば、日本の戦前から戦後への移り変わりの方が、目まぐるしく変わったのだということになるのかも知れない。

本稿の第二の目的は、この三人が戦前と戦後とに跨る経験を、内在的にどう繋げていたのかを検討し、戦後日本の歴史を論じる手がかりを提示することである。

そのキーワードは、アジア主義<sup>(10)</sup>である。ここで当面定義するアジア主義とは、「自らの帰属地域を起点として、『アジア』という概念を使うこと」で『他者』を競争・抗争・排除の対象とし、『アジア』という範囲の中での連帯を求める政治プロジェクト<sup>(11)</sup>である。日本を起点とするアジア主義の特色は、①英国に代表される西洋帝国主義や西洋文明を排除・駆逐し、②中国・朝鮮との連携を中心に「アジア」との連帯を掲げ、③アジアの平等性を建前としつつも天皇を頂く日本を盟主とし西洋への優位を確保するもの、とまとめることができる。大アジア主義などの場合には、②が前近代までの東アジア秩序のスタンダードであった中華を中心とする華夷秩序の「中華」の地位を日本が獲得する形で実現されることを意味した<sup>(12)</sup>。

しかし、同じアジア主義であっても、それぞれの系譜や出自、環境などによって、いくつかの異なる類型に分けることができる。別稿<sup>(13)</sup>では村田省蔵について、それを詳しく検討し、実業アジア主義と名づけた。本稿では、村田の実業アジア主義と対比する形で、藤山愛一郎のそれを選良アジア主義、水野成夫のそれを浪漫アジア主義と呼び、それぞれの特徴を分析することとしたい。この三者を分ける一つの要因は、アジア主義において重要な契機である「会う」という初期条件の位相である。本稿では別稿同様、アジア主義の「会う」側面にスポットを当てながら、タイプの異なる三人のアジア主義を分析することで、一見断絶しているように見える彼らの足跡の連続性を明らかにすると共に、彼らを通じて見える戦前・戦後の日本の断面を論じたい。

なお、別稿とはできる限り重複を避けるために、アジア主義についての詳しい説明は省略しているので、関心の

ある方は、別稿並びに関連著作を参照して頂ければ幸いです。

- (1) 松浦正孝「ビジネス・財界と政権のあいだ——第一次伊藤博文内閣から第三次安倍晋三内閣まで」『立教法学』第九二号、二〇一五年。
- (2) 同右論文及び、松浦正孝『財界の政治経済史』東京大学出版会、二〇〇二年。
- (3) 松浦正孝「ビジネス・財界と政権のあいだ」二七～二八頁。
- (4) 創立五十周年社史編纂委員会『プリヂェス・タイヤ五十年史』プリヂェス・タイヤ株式会社、一九八二年。
- (5) 藤山愛一郎「私の履歴書」日本経済新聞社『私の履歴書 経済人2』日本経済新聞社、一九八〇年。
- (6) 河合良成「孤軍奮闘の三十年」講談社、一九七〇年、二七六～二八八頁、松浦正孝「ビジネス・財界と政権のあいだ」二六～二九頁など。
- (7) 例えば、牧村健一郎「日中をひらいた男 高橋達之助」朝日新聞出版、二〇一三年、第三・第四章。
- (8) 松浦正孝「財界人の戦前と戦後のあいだ——村田省蔵と実業アジア主義」黄目進編『日中戦争』とは何だったのか——複眼的視点——ミネルヴァ書房、二〇一七年。本稿とこの論文とは、もともと一つの論文であったが、紙幅の関係もあって二つに分けた。このため、内容的に若干の重複があることを了解されたい。
- (9) 松浦正孝「財界の政治経済史」第五章第三節。
- (10) アジア主義についての本格的で示唆的な理論的考察として、姜克實『連帯』とは何か——アジア主義の理論解析』岡山大学文学部紀要』第六〇号、二〇一三年二月、がある。
- (11) 松浦正孝「アジア主義」『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、二〇一五年。
- (12) 松浦正孝『大東亜戦争』はなぜ起きたのか——汎アジア主義の政治経済史』名古屋大学出版会、二〇一〇年、三三～三四頁。
- (13) 松浦正孝「財界人の戦前と戦後のあいだ」。

## 一 村田省蔵（一八七八～一九五七）と実業アジア主義

### ビジネスの現場で

村田省蔵の生まれは東京の郊外渋谷の宮益である。家は元来裕福な商家であったが、父が陶器事業などに失敗して浅草に移り、父は歌舞伎の市村座の興行に従う身となった。その後再度の市村座の焼失でさらに苦境に陥った父

が、地方の巡業先で失意のうちに倒れたために、残された母子は失意と貧困の底に沈んだ。その後刻苦勉励して高等商業学校を卒業した村田は、立身出世を夢見て大阪商船に就職した。<sup>(14)</sup>

別稿で記したように、村田は大阪商船が揚子江航路を開拓するビジネスの最前線に送られ、上海、漢口、重慶で八年足らずを過ごした。英国や清国の汽船会社などと熾烈に競争すると共に、重慶などでは未開発の現地に溶け込むことに専念した。ここで彼は、中国民衆の多くと出会い、同じアジア（東洋）人としての実業アジア主義の立場を心に深く刻み付けたように思われる。

### 「大東亜戦争」へ

その後、中国で排日運動が盛んになると、日系の海運会社は苦戦するようになり、大阪商船の副社長になっていた村田は満洲事変の勃発を支持している。日中戦争が起ると、中国現地での実業における競争の最前線にあった大阪商船の社長として、やはり英国などと激しく角逐していた鐘紡の津田信吾らと共に大東亜細亞協会の評議員となり、反英運動の先頭に立った。この大東亜細亞協会は、日本を「大東亜戦争」へと誘うのに大きな役割を果たしたイデオロギー・ネットワークである。<sup>(15)</sup>村田がこのような役割を果たすようになったのは、実業の現場での体験から、アジアから英国を筆頭とする西洋帝国主義を駆逐し、代わって日本の商権を伸張させなければならないという大アジア主義のイデオロギーに共鳴していたからである。また村田は、海運業界における戦時体制作りのため、海運各社を結集して国策会社である東亜海運株式会社を設立、海運自治連盟理事長となった。第二次・第三次の近衛文磨内閣に入って通信大臣兼鉄道大臣になり、閣僚として海運統制に当たった。村田は、第一次世界大戦当時から、第二次世界大戦の勃発を予言し、「大東亜戦争」以前から日米開戦必至を確信していた。<sup>(16)</sup>

「大東亜戦争」が始まると、東条英機首相の要請でフィリピンの第一四軍の最高顧問に就任、その後初代のフィ







## 敗戦後における実業の立場から

しかるに、村田を待っていたのは、占領軍によるA級戦犯容疑者への指定であった。九月一五日巣鴨拘留所に収監された彼は、検事の取り調べに對して、日本の満洲事変や「大東亜戦争」を擁護する意見を述べた。

ところが、巣鴨を出所し公職追放解除になった頃から、村田は台湾とのみ外交関係を持つ日本のあり方に少しずつ疑問を抱くようになり、サンフランシスコ講和条約発効後になると北京政府との国交回復を主張するようになった。村田は実業の立場から、広大な大地と膨大な中国人を要する大陸中国との貿易を回復せずには、日本が立ちゆく道はないと考え、自分が元気なうちに日中国交回復を実現する責務があるという信念を固めるに至ったのである。

吉田茂首相から、共産中国を抜きに東南アジア華僑との貿易を行えるよう協力を頼まれた村田は、その不可なる所以を指摘し、逆に吉田に、大陸中国の現地を見て調査したいと要望した。彼は、財界の第一線からは引退しつつも、大陸との貿易で成り立ってきた関西財界の必要を代表する形で、共産主義や反共主義などの政治的立場とは関係なく、中国やソ連などとの貿易を回復する可能性を考えようとした。そして、一九五二年四月のモスクワ国際経済会議に、政府の反対を押し切って出席しようとした。当時は第三次吉田内閣（第三次改造内閣）であったが、会議への招待はソ連による平和攻勢の一貫であるからとして、政府が村田に旅券を発給しなかったため、村田はこれを断念せざるを得なかった。<sup>26</sup>

個人的には吉田茂とも親しかった村田であるが、対中政策などをめぐっては、吉田と対立する三木武夫などとむしろ近かったと言えることができる。国民民主党の三木らは一九五二（昭和二七）年二月農民協同党、新政クラブと合同し、改進黨を結成したが、党内で総裁候補を選ぶことができなかった。改進黨幹事長として党運営の主導権を握っていた三木は、一時期、村田省蔵に空席となっていた党総裁への就任を依頼しようとしたが、成功しなかった

という。<sup>(27)</sup> 一方、中央常任委員会議長だった松村謙三は、大麻唯男と共に、公職追放中の重光葵を総裁に擁立すべく動き、有力な総裁候補を持っていなかった三木は、重光に難色を示した。しかし結局改進黨は五月、三月に追放解除されたばかりの重光を総裁に推戴することとなり、六月重光が正式に改進黨総裁に就任した。<sup>(28)</sup> 結果はそうであったが、一時、三木が総裁候補として村田を招こうとしていたことは、両者の政治的立場が近かったことを物語っている。

### フィリピンとの賠償交渉

一九五一年九月のサンフランシスコ講和会議署名によって本格化した東南アジアとの賠償交渉のうち、ベトナムと共に国家賠償請求権を行使したフィリピンとの交渉は、特に重要なものであった。吉田首相は外務省を賠償交渉の窓口としつつ、財界人の永野護衆院議員や藤山愛一郎日本商工会議所会頭、岡田勢一サルベージ会社社長らを使などとして使った。そして、五四年四月から正式会談を始めることになると、戦時中のフィリピン大使などの経歴を持つ村田省蔵に特命全権大使を委嘱した。<sup>(29)</sup>

「大東亜戦争」での同志であったホセ・ラウレル元大統領やレクトー元外務長官ら有力な上院議員を友人に持ち、フィリピンをよく知ると自認していた村田は、この交渉の行方を樂觀視していた。しかし、日本軍政時代の多くの犠牲者と抑圧に対するフィリピンの反日感情のみならず、日本の大アジア主義が大きな負の遺産として交渉をこじらせ、交渉は混乱のうちに失敗し、村田は半月で帰国を余儀なくされた。村田自身、この時点では「大東亜共栄圏」の呪縛からまだ抜け出せておらず、それが幻想であったことを、思い入れ深いかつての任地フィリピンでいやというほど思い知らされたのである。

## 周恩来による衝撃

フィリピンからの失意の帰国後、五四年九月に日本国際貿易促進協会の初代会長に就任していた村田に、中国国債貿易促進委員会代理主席の雷任民の世話で、かねてより希望していた大陸中国からの招請状が届いた。五五年一月に北京を訪れた村田は、まず新生中国の変化に驚いた。これと共に、フィリピンを皮切りにインドネシア、ベトナムと要求して来た戦後賠償について、周恩来総理が「過去のこととは忘れます」と述べたことに感激し、周の語った「アジア人のアジア」という言葉に心をつかまれた。共産主義というイデオロギーとも過去の歴史とも関係なく、平等な相互互恵の立場で未来を指向しようと言う周恩来との会談は、アジア主義者としての村田にとって衝撃であり、大きな転回点となった。実業のための現地民衆との出会いに始まった村田の実業アジア主義は、周恩来との出会いによって、経済的利益の枠をはみ出した新たなフェーズのアジア主義に入ったと言えるかもしれない。

五五年五月日本国際貿易促進協会会長として第三次日中貿易協定に調印した村田は、翌年も日本商品博覧会に出席するため北京、上海と二度訪中し、帰国後の五七年三月にこの世を去った。<sup>(30)</sup>

(14) 「自叙伝」大阪商船株式会社編『村田省蔵追想録』同、一九五九年、二七六～二八五頁。先述したように、本章は、松浦正孝「財界人の戦前と戦後のあいだ」と内容的な重複がある。詳しい論証については、そちらをご参照頂きたい。

(15) 松浦正孝『大東亜戦争』はなせ起きたのか。

(16) 福島慎太郎編『村田省蔵遺稿 比島日記』原書房、一九六九年、三三三頁、一九四四年二月一七日の項。

(17) 同右、五九八～六〇〇頁。

(18) 同右、六一八頁、一九四五年七月二十五日の項。

(19) 同右、六一二～六一三頁、一九四五年七月二三日の項。

(20) 同右、六四六～六四八頁、八月一日の項。

(21) 同右、六五〇～六五一頁、八月一七日の項、六七二～六七三頁、八月二九日の項。

(22) 同右、六五一～六五三頁、八月一八日の項。

- (23) 同右、六五六～六五八頁、八月二日の項、六七〇～六七一頁、八月二八日の項。  
 (24) 同右、六七七～六七九頁、九月二日の項、六九六～六九七頁、九月一三日の項。  
 (25) 同右、六五九～六六〇頁、八月二日の項。  
 (26) 松浦正孝「財界人の戦前と戦後のあいだ」。  
 (27) 三木武夫「烈々たる気魄と愛国心の持主 村田先生」日本船主協会『故村田省蔵先生を偲ぶ』同、一九五七年。  
 (28) 安藤俊裕『政客列伝』日本経済新聞出版社、二〇一三年、二二四～二二七頁。  
 (29) フイリビンとの賠償交渉については、吉川洋子『日比賠償外交交渉の研究』勁草書房、一九九一年を参照。  
 (30) 松浦正孝「財界人の戦前と戦後のあいだ」。

## 二 藤山愛一郎（一八九七～一九八五）と選良アジア主義

村田省蔵は、上海・漢口・重慶など揚子江沿岸を中心とする中国の現地に深く入り込み、中国人と同じアジア人の一人として現地に浸透しようとし、実業に立脚したアジア主義を一貫して基盤とした。翻って藤山愛一郎のアジア主義は、父雷太から引き継いだ大日本製糖が工場を持った大東島、台湾、満洲、ジャワといった現地での実業の経験に、それほど根差したものはなかったように思われる。彼を特に強く突き動かしたのは、日本軍部が引き起こし、自分を含めた財界が止めることのできなかった日中戦争に対する贖罪意識であった。彼のアジア主義の特徴は、生まれながらのエリート（選良）としての「良心」を抛り所とすることであり、その対象は、その出自や財界人としてのネットワークによって結びついた「アジア」であった。彼は政治家としては素人性を払拭することができずに理想主義的に行動しようとしたが、党派性を持たなかった村田と異なり、多分に党派的であり、その意味において政治的であった。

## 財界のプリンス

よく知られるように、藤山愛一郎は、王子製紙専務藤山雷太の長男として生まれた。愛一郎の母は、三井財閥「中興の祖」として知られる中上川彦次郎の妻かつの妹みねである。これだけでも、非の打ちどころのない財界のプリンスであった。さらに、中上川の長女つやが後の財界の中心人物池田成彬の妻であったため、池田は愛一郎の義理の従兄弟としてその良き理解者となる。雷太は中上川の死後三井銀行を退社し、かつて自らが王子製紙社長の座を追った渋沢栄一の推挙で、一九〇九（明治四二）年に倒産寸前の大日本製糖の社長を引き受けた。そして、台湾糖の生産を拡大し南洋にも進出するなどして見事にこれを再建し大きく成長させ、他の事業でも成功を取めた。一九一七（大正六）年から二五年にかけて東京商業会議所会頭（同時に日本商業会議所連合会会長<sup>(31)</sup>）を務めるなど、財界においても地位を築いている。

愛一郎は慶應義塾大学を病気で中退後、最初から社長学を学ぶべきだという父の方針で、雷太の私設秘書を兼ねながら、二四年からカーネーション栽培会社の東京フロリスト、日本金銭登録機、池田化学（塗料会社）、有隣生命で社長業を学んだ<sup>(32)</sup>。一九三〇年に大日本製糖に監査役として入社し、怪我をした雷太に代わって事業を受け継ぎ始め、三四年雷太の引退と共に三六歳で大日本製糖社長に就任した。その後東京株式取引所理事や帝国劇場取締役<sup>(33)</sup>に就いた後、三七年には台湾製糖社長武智直道の後を継いで業界団体である日本糖業連合会会長となり、翌年末に雷太が死去する直前には東京商工会議所副会頭に就任、一人前の実業家として自信をつけている。そして四一年春、彼は四三歳で東京商工会議所、日本商工会議所の会頭に推された<sup>(34)</sup>。

愛一郎は二六年、団琢磨夫妻の媒酌で、安田保善社専務理事結城豊太郎の三女久子と結婚した。財界で池田成彬とコンビを組むことになる結城豊太郎が岳父となったことも、愛一郎の人生を左右することになった。父雷太がかつて仇をなしたものの恩で返されて以後心服するようになった渋沢栄一もまた、愛一郎にとって尊敬する人物であ

った。また、父の配慮もあって、岩下清周、郷誠之助、馬越恭平、大川平三郎、根津嘉一郎といった錚々たる財界の大物や大政治家とも、愛一郎は顔見知りとなっていた。<sup>(35)</sup>好むと好まざるとに関わらず、藤山愛一郎は、財界の主流である池田―結城ラインに組み込まれ、東京商工会議所・日本商工会議所会頭を継ぎ、当時の主要産業の一つであった糖業界を束ねる指導者として期待されていたのである。このように生まれながらの財界の指導者として期待されていたのは、藤山愛一郎と、渋沢栄一の嫡孫で戦時中の日銀総裁及び終戦後の大蔵大臣を務めることになる渋沢敬三のみであった。こうした出自及び経歴と、怖いもの知らずで理想主義的な「坊っちゃん」育ちの性格とが相まって、その後の愛一郎は、起伏に富んだ人生を送ることとなる。

### 日中戦争と藤山愛一郎

満洲事変後に政党内閣が崩壊すると、財界が政治の舞台に顔を出す機会も多くなった。さらに二・二六事件後、広田内閣に代わって成立した林銑十郎内閣に、岳父結城豊太郎は大蔵大臣兼拓務大臣として入閣し、池田成彬日銀総裁と共に、財界代表として軍部に協力しつつこれをコントロールしようとするいわゆる「軍財抱合」体制を体现することになった。すでに別の場所で明らかにしたように、結城財政は佐藤尚武外務大臣の和協外交を財政・経済の側面から支えるものとして機能した。そして、陸軍出先が進めていた華北分離工作に歯止めをかけ、中国統一を進める蒋介石政権との戦争を回避するための道筋をつけようとした。三五年一〇月に来日した中華民国赴日経済考察団への返礼として、日本財界は三七年四月兒玉謙次横浜正金銀行頭取を団長とする兒玉訪中団を組織した。訪中団は、砂糖・紡績などをめぐる密貿易や経済摩擦の問題を解決するための日中間協議を行うと共に、両国の実業家が経済・文化の側面から両国軍部の衝突を阻止するためのホットライン開設などで中国側と合意したのである。

兒玉訪中団のもう一つの重要な役割は、結城豊太郎蔵相から孔祥熙行政院副院長及び王寵惠外交部長に宛てた、

経済提携論による日中関係打開のメッセージを伝えることであつた。結城の女婿であり使節団最年少の藤山愛一郎大日本製糖社長が、孔祥熙、王寵惠と個別に会つた。そして、大蔵省を中心とする日本政府は、中国政府との暗黙の了解を前提とする日中経済提携によつて、陸軍出先（天津軍及び閩東軍）の少壮軍人を徐々に統制し、日中衝突の危機を打開しようとしているという秘密のメッセージを伝えた。<sup>(36)</sup>

さらに愛一郎は、父藤山雷太と蒋介石との友誼を以て、使節団でただ一人蒋介石との面会に招き入れられ、意見を交換した。その後持たれた使節団一行との茶会で蒋介石は、「あなた方日本の実業家に申し上げたい事は、あなた方日本の実業家の尊敬する大先輩であつた洪沢子爵は、論語の信奉者であられるが其の論語の中に『自らの欲せざることを他人に強いてはならない』と言う言葉がある。あなた方日本の実業家はどうかあなた方方の尊敬する洪沢子爵の信奉する論語のこの意味を充分理解して貰いたい」と述べたという。この三か月後に盧溝橋事件が起きた。<sup>(37)</sup> 愛一郎は、戦争を回避できなかった無力さを、その後もずっと恥ずかしく思っていたと戦後に述べている。

日中戦争が始まると、藤山は中国における事業に関心を持つようになった。藤山は陸軍の中では、満洲関係の関東軍と別系統の旧支那班の「支那をいじめないでやってかなきゃいけないんだ」という影佐偵昭らと付き合いがあつたという。影佐には、汪兆銘工作でハノイに亡命した汪を迎えに行くため自分を大日本製糖の社員ということにして欲しいと頼まれ、協力したことがある。<sup>(38)</sup> この縁もあつて、汪兆銘政権のできた三九年に、華人資本の呼びかけで華人と合弁を組み、蘇州に恒豊麵粉、香港に貿易や造船を業務とする福大公司という現地法人を作り、藤山は社長となつた。その後両社とも利益を上げるようになり、藤山はしばしばビジネスで中国に渡ることになつた。<sup>(39)</sup> 第一次近衛内閣では有馬頼寧農相から近衛新党への参加を求められたが、大日本製糖を始めとする事業に追われる藤山は、「とても政治にたずさわる余裕はない。考えておきましょう」と多忙を理由に断つて<sup>(40)</sup>いる。



## 東条内閣打倒と岸信介との関係

戦時中、藤山は日商会頭、重要産業協議会顧問、南洋協会副会長、大東亜建設審議会委員、大政翼賛会総務、翼賛政治会常任総務などの役職に就いた。海軍とは、父雷太が海軍好きだった関係でかねてより付き合ひがあり、日商会頭という肩書きの故もあつて四二年から海軍省顧問となつた。<sup>(4)</sup>四二年六月には、台北から香港、シンガポール、スラバヤ、ジャワ、バリ、ボルネオ、セレベス、フィリピンをめぐる各地と、南方占領地とを、中将待遇で視察して回つた。ミッドウェー海戦で戦局が悪化すると、陸海軍の抗争を憂慮した藤山は東条内閣打倒を検討し始め、まず義理の従兄弟である池田成彬に私見を述べた。すると池田が同調し、木戸幸一内大臣、近衛文麿にも相談を持ち掛けた。四四年になると、石川信吾海軍少将や、岡田啓介首相秘書官などを務めた大蔵省の迫水久常らと計つて、六月二日と九日の両日、白金の自邸に岡田啓介・米内光政・末次信正の三大将を招待し、東条内閣倒閣の前提となる海軍一本化を実現する役割を果たした。<sup>(4)</sup>

この後、彼らの間では、東条内閣を倒すには、陸海軍が対立している航空機増産問題で閣議対立を作り出し、閣内不一致で総辞職に持つていくのが最善だということになつた。このため、四四年二月の内閣改造で運輸通信大臣となつていた五島慶太東京急行電鉄社長に閣議対立を引き起こす役の白羽の矢が立ち、日本商工会議所で藤山会頭の下に五島が副会頭を務めていた関係で、藤山が説得に赴いた。しかし、五島の回答は、「せつかく大臣になつたばかりだ。その役だけは勘弁してくれ」という正直なものであつた。

代わつて、四三年一月に新設された軍需省の事務次官・国務大臣となつていた岸信介に、藤山が閣内不一致を創出する役割を頼むこととなつた。藤山は、実業界に入った当初、引き受けた有隣生命の営業地盤を農村に求めようとし、産業組合と強いつながりを持つていた有馬頼寧の紹介で産業組合幹部や井野硯哉ら農林官僚と親しくなつた。そして井野に紹介されたのが統制経済を推進する革新官僚の岸信介で、以来、岸と親しく付き合うようになつ

ていたのである。藤山が岸に頼み込んだ結果、岸が他に引き受け手のない難事業を悲壮な覚悟で引き受け、岡田啓介らも嶋田繁太郎海相を揺さぶるなどして、ようやく東条内閣総辞職を実現することができた。<sup>(43)</sup> 藤山は、この時の岸の協力を、強く恩に感じるようになる。

### 敗戦後における岸信介の「お世話」

終戦時、大日本製糖は本拠地である台湾を失って打撃を受け、三七年に設立された日東化学も八戸工場と東京の中川工場を焼かれて、横浜工場しか残らないという惨状であった。しかし、大日本製糖の所有する北大東島・南大東島から取れる燐鉱石を活用して過燐酸肥料とアルミナを生産する会社であった日東化学は、終戦後燐鉱石が入手できなくなったためにアルミナ製造を断念し肥料生産に一本化したことが幸いして、占領期の食糧増産政策に追い風を受けることになった。外地会社に指定され清算会社となっていた大日本製糖も、その後国内での事業再開が許され、砂糖の輸入再開により復旧した。

藤山愛一郎は四六年二月、日商及び東商の会頭を辞任し、四八年公職追放となったが、日東化学が資本金の小さな会社であったことが幸いして追放中も社長を続けることができ、五〇年一〇月に追放は解除された。翌年二月経済同友会代表幹事となり、七月には設立された日本航空の会長に就任し、八月東京商工会議所、九月日本商工会議所の会頭に復帰した。日商会頭だった高橋龍太郎が通産大臣に就任したため、愛一郎に会頭復帰を求める声が強くなり、首脳人事を会頭に一任すると共に、経団連が日本産業協議会・日商・日本中小企業連盟（商工経済会の後身）・日本貿易団体協議会・全国金融団体協議会を傘下に置く形になっていた財界を再編するという条件で、これを引き受けた。商工会議所を、中小企業団体から大企業も含めた総合的経済団体とし、地域別総合団体とするという条件である。その上で日商を経団連への従属から解き放つべく、五二年二月、藤山は石川一郎経団連会長に経済

団体再編成を申し入れた。石川は抵抗しようとしたが、結局は日本商工会議所と日本中小企業連盟が経団連から脱退し、中小企業を基盤とする地域総合経済団体となつて、これに経団連、日本経営者団体連盟、経済同友会を加えた経済四団体から成る「財界五二年体制」が成立したのである。<sup>(44)</sup>この経緯は、藤山が当時財界において持っていた力を示すものであつた。

戦後、東条内閣の閣僚であつた岸信介と井野硯哉が共に巢鴨刑務所から出所した時、藤山はできるだけ恩返しをしようと思ひ、岸に日東化学工業監査役、井野には大日本製糖監査役のポストを提供して援助した。戦時統制経済を推進し、開戦の詔書に署名し、「戦犯容疑者」となつた岸信介に対する国民感情は極めて悪く、特に戦時体制化が進む中で革新官僚の筆頭として軍部と提携し民間財界を圧迫した岸に対する財界の反感は強かつた。第二次近衛内閣の商工次官時代に財界出身の小林一三商工大臣と衝突して辞任に追い込んだことも、財界の岸に対する反感につながつていた。しかし藤山は、岸だけではなく、南方で捕虜になつた人などへの、戦中とは打つて変わった世間の冷たい仕打ちが「少ししやくに触つて」「いくらかむきになつて」、岸を応援したと回顧している。<sup>(45)</sup>

これほどまでに戦争の負の遺産を背負つて政界に復帰した岸が、保守合同の立役者となり、さらに首相となることができたのは、一つには藤山愛一郎の援助によるものであつた。保守合同のために財界・実業界からは多くの金が出たが、岸信介への潤沢な政治資金は、親友である藤山愛一郎日商会頭と、統制時代の岸の同志で企画院次長や石炭統制会理事長を務めた植村甲午郎経団連副会長によつて賄われた。藤山は、「岸さんと親しい財界人といへば、当時は、私を除けばおそらく植村甲午郎さん（元経団連会長）ただひとりだつたらう」と回顧している。<sup>(46)</sup>藤山日本商工会議所会頭と、財界の金づるをまとめていた植村甲午郎経団連副会長という二人の後援者を得て、日本商工会議所、経団連という二つに分かれていた経済団体の中心の資金をどちらも押さえた岸は、金の力を背景にした強い政治力を持つようになったのである。

その一方で、後に岸に口説かれて外務大臣になるまで、藤山は、自分自身が政治に関与したり、自分が政治家になつたりするなどというつもりは全くなかつたと、後にこう言っている。「第三者として、岸さんなら岸さん、だれならだれを通じて政治をやつてもらうとか、あるいはそういう人を援助するとか、援助しなきゃこれはいけないんだという意識があります、財界人としてですね。」「政治に関心を持つというよりも、政治家に関心を持つて政治に足をつ突つ込んでたようなもんですね、岸という人に」。しかも、岸を支援するからといって、特に岸の政治的信条を応援しようというわけでもなかつた。驚くべきことに、後に明らかに憲法九条改正や安保改定、中ソとの関係などをめぐる岸との意見の対立について、藤山はほとんど意識したことがなかつた。その辺りを問われた藤山は、こう答えている。

もう政治家になつてから、岸さんとの違いがはつきり、わたし、見えてきたわけですよ。それまでの間は、岸さんとある間隔をもとに財界人としてお世話するという形。あるいは友人としてお世話をする形。あるいは戦争中いろいろなために働いてもらった関係でお世話をするという形だつた。政界に入つてみてですね、いろいろな問題を取り扱つてみて、そして『これじゃあ、なるほど岸さんの体質はこういうことなんだ』<sup>(48)</sup>というのはつきり分かつてきたんです。甚だ申し訳ないことなんですけどね。

藤山が岸を支援した理由は、藤山の説明によると下記の通りである。

ことごとく政治構想を同じくしてということではないですね。やつぱし前からのいきさつといたしますか、そういうことも非常に大きく動いてますよね。それから当時からいえば、やつぱし岸さんぐらいがやり手という

か、あるいは度胸を据えて、ひとつやってみようというような気分で政治に取り組んでくると。そして非常に熱心だ。そういう人はほとんどあまりいませんでしたからね。ですから、そういう意味ではやっぱし、わたしの知った範囲内にあんまりいませんでしたから、自然にどうしても岸さんを支援していくという立場に立って、ずっと来ていたわけですね。<sup>(49)</sup>

東条内閣を倒すという大役を命がけて引き受けてくれたことへの恩義から、政策や政治信条は度外視して、言わばタニマチ的な意識から、藤山は政治に情熱を燃やす岸を応援したというのである。当時、藤山が具体的な政治にはほとんど関心を持っていなかったことが、窺われる。

終戦を迎えると、藤山はかねてより私淑していた義理の従兄弟の池田成彬を真っ先に大磯に訪ねた。将来を相談した藤山に池田は、「キミ、衆議院に出なさい」「これからは議会政治の時代になるんだよ。自分はいま、いろんな実業家に衆議院に出るよう口説いている最中だ。キミもぜひ出てもらいたい一人だ」と力説したが、藤山は戦時中に経済団体の責任者の地位にあった自分は責任を免れないと思ひ、応じなかった。そして、白金の邸宅を進駐軍に接収して貰うように、自分から終戦連絡事務局に電話で申し出た。四六年一月には、日商会頭など一切の公職を辞した。

五〇年一〇月に四七年一月からの公職追放が解除されると、藤山は五一年八月東商、日商の会頭に復帰したが、改進黨総裁にならないかという勧誘も、国政に転出したい安井誠一郎に代わって東京都知事になって欲しいという本人からの依頼も、断った。<sup>(50)</sup> 藤山の周辺では「財界世話業になれ」という声もあったが、藤山は「かつての郷誠之助さんとか井坂孝さんのような財界世話業というものは、今日の財界ではもはや成り立つとは思っていない<sup>(51)</sup>。自分の持ち分だと思われる商工会議所の代表として行動すること以上に、特別な政治観念もなく、政治に自らが積

極的に関与していくことも全く考えていなかったたのである。財界のプリンス藤山愛一郎がまず第一に考えていたのは、支援者として岸信介を支えることであつた。

### 東南アジア戦後賠償と保守合同

当時すでに藤山は、岸信介と呼応して保守合同を推進する財界人と目されていた。<sup>(53)</sup> 藤山は日商総会で、自由党・民主党両党の三役を前に、政局を安定させるため合同するよう演説したといふ。<sup>(54)</sup> この頃、藤山は「第一に考えなければならぬことは今後日本の生きる途、経済の繁栄をもたらし途はアジアの諸国の繁栄と共にあることを忘れてはならない」と論じ、東南アジア諸国の産業建設を援助すると共に、東南アジアの産業発達と共存できるように農業を含む日本の産業構造を高次元のものへと改革し、資源の活用を図り失業問題を解決すべく、強力な政治勢力の結集を求めた。保守合同した政府による計画的な経済運営や占領政策の是正を強く要望した藤山は、さらに「財界として政治に直接干渉することは問題があるとしても保守政党を支持する以上欧米諸国の様に例えば保守新党の生誕を機会に財界から個人の資格で入党する程の熱意をもつべきではないか」と述べ、財界人は保守新党に入党すべきだとまで言い切るようになった。藤山は、緒方竹虎自由党に何度も会って保守合同へのアジェンダを詰めるほど保守合同にのめり込んでおり、その背後には岸民主党幹事長の要請があつたといふ。<sup>(56)</sup>

政治資金においても、政界に対する斡旋においても、岸信介に入れあげて熱心になり過ぎた藤山が、政界入りするのは時間の問題だつた。但し、岸との関係だけではなく、上に触れた東南アジア諸国への配慮が、保守合同への動機にもなつていったことは否定できないであろう。藤山の大本日本製糖は戦前から台湾や東南アジアに展開していた企業であり、現場での実業経験はほとんどなかつたにせよ、藤山には中国のみならず、東南アジアに対する関心もなかつたはずはないからである。中国との戦争を止められなかつたことには大きな責任を感じ、東条内閣打倒に



も関わった藤山ではあったが、同時に、敗戦後急に「大東亜戦争」に関与した者を糾弾するようになった世間の風潮に反感を感じ、天邪鬼的に岸を応援する面があったことは、先述した通りである。さらに、戦勝国米国に対する些かの反発や、自社が事業を展開して来た東南アジアに対する贖罪意識などもあって、藤山には「大東亜共栄圏」の意識の残滓を含む、対米従属一辺倒とは違うアジア主義的な政治傾向も芽生えていったのではないかと思われる。

一九五五年四月にインドネシアのバンドンで開かれた第一回アジア・アフリカ会議が開かれることになると、藤山はアジア・アフリカの有色人種の代表が一堂に会することに画期的な意義を感じ、岸信介民主党政幹事長に行きたいと伝えていた。そして五五年末に日本政府代表団の首席代表が藤山と旧知の仲である高碕達之助経済審議庁長官に決まると、藤山も経済界代表として顧問団に加わった。日中戦争直前に兒玉訪中団に最年少メンバーとしてメッセージを携えて参加し、蒋介石とも個人的に会見した藤山にとって、バンドン会議は是非とも参加したい会議であったに違いない。

藤山は、興奮して会議を傍聴すると共に、団長の高碕と周恩来中国首相との非公式会談を実現するよう、外務省の慎重論を押し切って主張した。そして、高碕・周会談にも一度陪席した。<sup>(57)</sup>バンドン会議は、藤山にアジア・アフリカ地域における日本の役割に関する強い印象を与え、熱意をもって国家建設を進めている東南アジア諸国に対して、戦後復興がある程度進んだ日本は、戦後賠償問題を早急に解決して国交樹立すべきだという強い思いを植え付けた。そして会議から帰国した藤山は、インドネシア、フィリピンとの賠償問題の早期解決の必要をあちこちで訴えた。保守合同を訴える藤山が、東南アジアへの援助と、東南アジアと競合しない補完的な高次元の産業構造への転換を常に第一にその目的として掲げていたのは、そのためでもある。

保守合同実現後の五六年三月、自民党政幹事長の岸信介に呼ばれた藤山は、「フィリピンとの賠償交渉が煮詰まっ



て来たので、至急マニラへ行ってくれないか」と要請された。<sup>(58)</sup>先に述べたように、フィリピン賠償交渉は五二年から村田省蔵がこれに当たってきたが、日本軍政期に日本がフィリピンに与えた被害があまりに甚大であったためフィリピンの対日感情は極めて悪く、フィリピンに知己が多く大アジア主義のフィルタールからフィリピンを理解していたつもりの元駐比大使の村田でも、なすすべがなかった。<sup>(59)</sup>鳩山内閣は成立後、岸自民党幹事長の要請で初入閣していた財界出身の高碕達之助経済審議庁長官を事実上の賠償担当者とし、吉田政権末期にフィリピン側が日本側代表となることを求めていた永野護は顧問格で参加することとなった。永野には、日本国内で大蔵省やフィリピン貿易に携わる中小企業から反対があり、謝罪でなく資源開発にしか関心がないような発言がフィリピンでも報道されて強い反発を買ったため、フィリピン上院においても批判が強かったのである。高碕らの賠償交渉を、村田省蔵や財界人を中心とするフィリピン協会は、側面から支えた。

高碕、永野の財界人出身者と、重光外相、岸自民党幹事長が中心となって進められたフィリピンとの賠償内容と賠償額をめぐる交渉は、マニラの卜部敏男日本在外事務所所長代理とフェリノ・ネリ賠償交渉主席代表（大使）との間で概ね詰められ、首相の正式書簡を伝達する特使を送ることになった。この特使には、鳩山首相に対する確執が残っていた旧自由党系に近く、経済外交がわかる人物が適任とされた結果、すでに村田を主席全権とする全権団の一員としてフィリピンを訪問したことがあり、岸に個人的に近く、しかも池田勇人も良い関係にある藤山に白羽の矢が立った。

当初は鳩山書簡を伝達し、協定に調印することだけを依頼されて来た藤山であったが、協定条文作成のための交渉が予想外に難航して一か月マニラで足止めを食い、私的所用のためにも一時帰国することとした。この間にフィリピン側の要望をも予め入れた「藤山私案」を作成した藤山は、これをもとに東京で岸幹事長、旧自由党系で大蔵省に対する大きな発言力を持っている池田勇人、吉田茂、政府閣僚、自民党、財界有力者らの間を精力的に調整し

説得してまとめあげるのに成功した。これによって交渉は急速に進展し、賠償協定案は妥結したのである。<sup>(60)</sup>そして、五月九日高碕達之助経済企画庁長官を主席全権とする日本全権団がマニラに赴き、賠償協定に正式に調印した。日比賠償外交協定交渉の過程を分析した吉川洋子は、この作業に関わった永野護、高碕達之助、藤山愛一郎らの財界人らについて、アジア諸国の貧困からの脱却と経済繁栄に尽力した親アジア派の指導者として評価しながらも、日本の経済及び経済界の利益を最優先する戦後復興期日本の価値観を代表し、フィリピンの国民感情を経済要因に従属させて予定調和的に解釈した主観的楽観論者と批判している。<sup>(61)</sup>批判には一理あるが、賠償にあたって実業や経済の視点を組み合わせることは重要であり、東南アジアと日本の双方の経済を発展させるという目的と併せた賠償問題解決という方法自体に問題があったとは思われない。むしろ、関係する指導者や企業などが、決定過程でどのような政治姿勢を持ち、また現場の実施過程でどう振る舞ったかが問われてくると言うべきではないだろうか。

吉田対反吉田の政局から超然としている村田省蔵を除けば、本稿の冒頭で述べたように、藤山、高碕といった東南アジア賠償に関わった財界人らは、鳩山一郎・岸信介ら反吉田派政治家を支え、また歴史的にも「大東亜共栄圏」に展開する企業との関わりが強かった。永野護にしても、吉田との個人的関係はあり、弟の永野重雄が吉田や池田勇人を支えた「財界四天王」の一人だったこともあるが、一方で自由党内の反吉田派である民主化同盟の委員で、岸や鳩山と近い関係にあった。フィリピン鉱石を必要とする鉄鋼業界との関係から、利権に強い関心を抱く永野がフィリピンなど東南アジアとの賠償問題に関わってきたことも、吉川洋子によって指摘されている。<sup>(62)</sup>賠償問題の解決は、主に鳩山内閣や岸内閣など、反吉田派の内閣によって実現された。藤山も含めてそれに関わった財界人らには、経済圏的発想にせよ、贖罪意識の裏面にあるかも知れないアジアの盟主的使命感にせよ、「大東亜共栄圏」的な発想の残滓が残っていたように思われる。もともと、だからと言って、それらがすべて批判されるべきことで

あるわけではない。

### 政治家への転身と日米安保改定

フィリピンでの予想外の時間潰しが、藤山に調整者としての政治的手腕を発揮させた結果、藤山の運命はそれまでの軌道を大きく外れ始めた。それまで政治資金の提供者、財界における自分の強力な支持者としてのみ藤山に依存して来た岸信介が、にわかにならぬ藤山に外交をやらせても面白い<sup>(64)</sup>と考えるようになったからである。日ソ共同宣言調印により国際連合加盟も実現されることになる<sup>(64)</sup>と鳩山内閣も総辞職することとなり、自民党総裁選に出馬することになっていった岸が、「オレは間違いなく石橋君に勝つ。ついでに党内を見渡しても格好の外務大臣がいな<sup>(65)</sup>い。ぜひ承諾してくれないか」と藤山に依頼した。藤山は、従来通り側面から援助する方が良いと断り、岸が総裁選で石橋湛山・石井光次郎の二、三位連合に敗れたことでこの話は立ち消えた。しかし、石橋首相が病気で退陣し、岸が二か月後首相になると、岸は共通の友人である井野碩哉を使って藤山を強く説得した。岸が藤山外相に固執する理由は、井野によれば、「外務省の人脈は、吉田派とアンチ吉田派に分かれていて複雑だ。それを抑えるのは無色の人物でなければならぬ。それに今後の外交は経済に重点をおく必要がある、経済のわかる国際感覚をもっている人物が要求される」ということであつた。井野はこの時、岸から「自分のあとに総理大臣がいな<sup>(65)</sup>い。藤山を総理にするのだから」と聞いたという。

岸の回顧は次の通りである。

藤山君を入閣させることは、私はずっと考えていた。初めは政治家になることを躊躇したんだけど、私がずいぶん口説いて外務大臣になつてもらつた。特に藤山君にはアジア外交のなかでも中共の問題を頭においてや

ってもらうというのが、私の考えにあった。それと、外交といっても、アメリカの問題にしる、アジアにしる、経済関係が基底をなすでしょう。だから藤山君が今までやってきた経済の方面における才能を十分に発揮してもらいたいと思っただけです。そして、将来保守党内において重要な政治家として大いに活動してもらいたいと、機会のあるごとに絶えず口説いたんです。

そもそも藤山君とは東条内閣時代から非常に親しかったし、戦後巢鴨から出てきた私を日東化学の重役にしておき、メシを食わせてくれたという恩義もあるから、ぜひ政界に入つて、将来大いに伸びてもらいたいというのが私の彼に対する希望だったわけです。<sup>(66)</sup>

財界で藤山の政界転身を支持する声はほとんどなかったが、藤山が引き受けざるを得なくなった最大の理由は、岸が首相になってしまったことである。すでに、藤山の岸に対する財界人としての援助のあり方は、財界人としての矩を越えていた。白洲次郎らによる吉田茂の側近政治を批判し続けてきた藤山にとって、岸が最高権力者になつて岸への依頼ごとを持ち込む人たちが自分の元に押し寄せてくるようになった以上、岸との関係を全く絶つか、入閣して岸と一蓮托生するしかなかった。<sup>(67)</sup>自分が父雷太の下で生まれながらにして恵まれた環境で育ってきたことへの負い目や、戦争を止められなかった悔恨や贖罪意識も、政界に入つて「泥まみれ」になる覚悟をする際の重要な考慮であった。<sup>(68)</sup>

外相になって藤山が取り組むことにしたのは、日米安全保障条約を改定することであった。藤山によれば、外相になるまでは日米安保を改定するという考えは「正直に言ってまったく持っていなかった」という。しかし外相として国会での質疑に応じたり事務当局から説明を聞いたりしているうちに、占領期のままの権利・義務関係が残つたままサンフランシスコ講和会議で日米平和条約を締結したために、安保条約や行政協定をめぐって様々な問題が

起こっていることを知った。このため、五八年五月の総選挙で初当選した藤山は、岸首相に安保改定をやるうと提案し、民主党幹事長時代から改定を試みていた岸からも応諾があり、岸内閣での安保改定が進んだのである。<sup>(69)</sup>藤山の意図は、論議が集中することになる核問題や極東の範囲などの問題ではなく、占領下で行われていた不平等条約の状態を是正したいという一心であったという。<sup>(70)</sup>アメリカに対する不平等条約の改正として安保改定を志したという動機は、アジア主義として理解することができる。

五八年九月頃から、外交問題に大きな影響力を持ち安保改定に批判的だった吉田元首相を説得するために大磯通いをするうち、藤山は「そのころ初めて、二十年来つきあってきた岸さんの体質に不安を持つようになった」が、「それでもとにかく、岸さんを助けて安保改定だけは実現しなければならぬ」と決意した<sup>(71)</sup>という。藤山の立場は、ソ連に脅威は強く感じつつも「できるだけ日本と中国とは手を握って」「アジアの平和と安定を強くする」という考えで、<sup>(72)</sup>戦前の大東亜共栄圏からの延長線上にアジアの盟主としての日本の地位を認めさせ、防衛力を増強することで日米関係を対等にしようという岸<sup>(73)</sup>とは明確に違っていた。

安保改定をめぐり、民衆の「戦犯岸を倒せ」「安保阻止」の運動、党内の反岸闘争が強まる中で、藤山は外相として必死で安保改定の批准を成し遂げた。しかし、そこから散会後の国会に戻った藤山は、岸首相が自分の帰還を待たずに総辞職のための臨時閣議を終えてしまったことを知り、大きなショックを受けた。<sup>(74)</sup>また、藤山は、退陣を決めた岸から岸後継として総裁選に出るよう言われ、岸の言葉をまともに信じて出馬準備を進めたが、その後岸から、河野一郎のついでに石井光次郎政権の出現を阻むために、出馬を取りやめて池田勇人に総裁の座を譲るよう強く言われて反発した。そして、岸に梯子を外された後も総裁選に出馬し、藤山派を作って三度総裁選に出て資産を蕩尽し、「絹のハンケチを雑巾に使った」というその言葉通りの後半生を歩むことになった。安保改定の批准から岸後継問題にかけての一連の出来事で、岸との友情は壊れた。<sup>(75)</sup>藤山は小世帯の藤山派「藤友会」と共に、政界の

孤児になったのである。

六〇年、六四年、六六年と三度の総裁選で、池田勇人、佐藤栄作と戦った藤山は、人間的には率直で明るさのある池田勇人に好意を持ち、一種の暗さを持ち決して本心を見せない佐藤栄作を好きになることができなかった。<sup>(76)</sup>藤山に首相の座が一番近づいたのは、池田が病気で政権を手放すことになり、河野一郎との間で連合を組む話が出た時であるという。池田や池田派を継ぐ前尾繁三郎らは藤山に好意ある態度を見せたが、財界四天王ら財界が佐藤を支持し、吉田茂の後押しもあって、結局は池田裁定により佐藤が無投票で後継総裁に選ばれた。<sup>(77)</sup>

なお、岸内閣の外相であった藤山は、入閣前に骨を折ったフィリピン賠償に引き続き、ベトナムとの賠償問題を、国会対策に苦勞しながら強行採決で処理した。インドネシア賠償は国内ではほとんど反対を受けずに解決し、さらに日ソ通商協定も締結した。このため藤山は、「私は外務大臣なる前にフィリピン賠償やりましたから」「賠償問題はほとんど終わりました。」<sup>(78)</sup>「半分は私の手でやったというような感じがしますね」と賠償問題など岸内閣における外交上の実績を自負している。ベトナムとの交渉は、一九五六年三月に経団連が第一回経済協力使節団（東南アジア親善使節団）を送った際、前半の日程のベトナム・カンボジア訪問での団長を務めた植村甲午郎経団連副会長に、藤山外相が、機会があればベトナムとの賠償交渉の糸口を見つけるよう依頼したことから始まった。植村はベトナムの通産大臣に対して、多額の賠償を請求する代わりに低利長期借款によって経済建設を急ぐ案を提示し、良い感触を得た。このため、五千万円の賠償による経済開発構想（植村試案）を作成し、翌五七年九月に自ら外相特使としてベトナムとの賠償交渉に臨んだ。いったん帰国し、首相特使として一二月にベトナムを再訪した植村は、試案をもとに、ダニム発電所など三九〇〇万ドルの賠償と九〇〇万ドル余りの長期低利の民間借款を内容とする賠償協定を、五九年五月に調印することに成功している。<sup>(79)</sup>賠償など戦後処理を含めて、ビジネス・財界が政治に関わらなければならぬ時代であり、藤山はその代表として、ビジネス・財界と連携する際の媒介役を担ったので



ある。

「安保問題の次は中国問題だ」

外相時代、藤山が最も力を割かなければならなかったのは、日米安保条約の改定交渉であった。しかしその一方で藤山は、日中関係も打開しなければならぬと考えていた。五八年三月に、日中貿易促進議員連盟が中心になって第四次日中民間貿易協定が調印されると、藤山外相はこれに協力しながら日中関係を少しずつ進展させていこうとしたが、岸首相の方針はこれと異なっていた。そのうち五八年五月に長崎国旗事件が起こり、日中経済関係は途絶した。日米安保改定に忙殺されていた藤山は「安保の次は中国問題だ」と考えていたが、結局安保騒動でその機会を訪れなかった。<sup>(80)</sup>

総裁選に敗れ、佐藤内閣が誕生すると、藤山の政治的関心は、はっきりと中国問題へと移った。<sup>(81)</sup> 藤山愛一郎の場合、政治への問題関心は、人とかかわりの中で段階的に移っていくことに特徴がある。戦前は、父雷太や岳父結城豊太郎との関係で、日中関係改善の使いを果たした。戦後は、日本商工会議所の会頭として財界の一半を担いつつ、岸信介との交友によって次第に保守合同に関わるようになり、フィリピン賠償などの東南アジア問題にも関与することで、両者を連動させるようになった。その後、藤山の関心は東南アジアとの賠償問題や経済提携から、日米の対等関係実現のための日米安保改定へと移り、岸との別離と共に日中国交回復へと明確にシフトしたのである。藤山とアジアとの関わりは、スーパー・エリートとしての人間関係に起因する。選良アジア主義と名づけた所以である。

第一次佐藤内閣改造で、一九六五年六月に藤山は経済企画庁長官として入閣したが、それと同じ頃、親中派の松村謙三が藤山に接近してきた。そして、松村は藤山に、佐藤内閣の閣僚を辞職すること、訪中することを勧誘



した。<sup>(82)</sup> 藤山が六六年八月の第二次改造でも佐藤内閣に留任すると松村は藤山から一時離れたが、藤山が国連での中国代表権問題をめぐって佐藤外交を批判するようになると、再び藤山に訪中を誘うようになった。藤山は佐藤再選阻止に向けて辞表を提出し、赤城宗徳・石田博英・宇都宮徳馬らの肅党派と連携して、六六年一二月の総裁選に出馬した。この時、松村は藤山陣営の事実上の選対本部長として働らき、松村派、中曽根康弘派などの支持で藤山は八九票を得た。この後、藤山、松村、中曽根らの反佐藤勢力は総選挙に際して肅党推進協議会を結成し、前尾繁三郎派、三木武夫派を加えて新政策懇話会を作った。新政策懇話会は佐藤三選阻止の拠点となり、六八年の総裁選ではこの中から藤山、前尾が出馬した。藤山によれば、新政策懇話会を中核として、この後日中国交回復が推進されたという。<sup>(83)</sup> 反佐藤という権力的契機が、日中国交回復という政策的連携へと結びつき、佐藤派を割った田中角栄がそれに乗ったということになるか。さらに遡れば、石橋内閣誕生直前の五六年一二月の自民党総裁選で反岸連合を組んだ池田派や石橋派の底流が、五九年一月の総裁選でも反岸の立場の表明として松村謙三への一六六票となったが、すでにこの動きが、田中角栄による日中国交回復を支持する勢力の源流であったのだと見ることもできよう。<sup>(84)</sup>

第一次佐藤栄作第一次・第二次改造内閣に経済企画庁長官として入閣したのを最後に、藤山は政権から距離を置くようになった。そして日米安保改定を実現した元外相の藤山が中国に行っても批判されるだけだという報道などもあったが、藤山は七〇年三月、戦後の新中国に是非行きたいという念願かなって、松村謙三の友好訪中団に加わった。周恩来首相の方から、バンドン会議で会った藤山がその後どうしているのかという問いかけが松村に対してあり、中国側からは藤山の訪中に前向きであることが伝えられて来ていたのである。周は、松村訪中団に対して、佐藤内閣の姿勢を激しく批判した。それまでも周は、松村との会談で岸内閣に対する強い不信感を表明していたが、池田内閣で改善しかけた日中関係は、佐藤内閣になって再び悪化していたのである。こうした中、藤山は、七

○年二月日中貿易促進議員連盟を発展的に解消して日中国交回復促進議員連盟を組織し、引退した松村に代わって自民党親中派議員の中心となった。七一年二月には藤山訪中団を結成し、日中覚書貿易交渉団と共に訪中した。そして七二年七月佐藤内閣が退陣すると、田中角栄内閣が日中国交回復を実現した。<sup>(85)</sup>七三年から八五年にかけて藤山は、村田省蔵が初代会長を務めた日本国際貿易促進協会の第四代会長となっている。

- (31) 西原雄次郎『藤山雷太傳』藤山愛一郎発行、非売品、一九三九年、三七五・六七四頁。
- (32) 藤山愛一郎『藤山愛一郎集』現代随想全集23 藤原銀次郎、小林一三、藤山愛一郎集』創元社、一九五四年、三一六～三二五頁。
- (33) 同右、三四一～三四三頁。
- (34) 同右、二五五～二五六頁。
- (35) 藤山愛一郎『政治 わが道』藤山愛一郎回想録』朝日新聞社、一九七六年、二五二～二五五頁、同「私の履歴書」日本経済新聞社『私の履歴書 経済人2』同、一九八〇年、二七一頁。
- (36) 松浦正孝『財界の政治経済史』第五章第三節。
- (37) 藤山愛一郎『蒋介石総統への手紙』『現代随想全集23 藤原銀次郎、小林一三、藤山愛一郎集』。
- (38) 藤山愛一郎『藤山愛一郎政治談話録音 速記録』国立国会図書館サービス課政治史料課、二〇二二年、三～四頁。これは一九八一年一月二日から二月二日に四回に分けて録音したもので、聞き手は共同通信社総務局長遠藤勝巳である。
- (39) 藤山愛一郎『私の履歴書』二七八頁。
- (40) 藤山愛一郎『政治 わが道』二九頁。
- (41) 藤山愛一郎『藤山愛一郎政治談話録音 速記録』三～四頁。
- (42) 藤山愛一郎『政治 わが道』三六～三八頁、二九〇～二九二頁、同「私の履歴書」二八〇～二八三頁。
- (43) 藤山愛一郎『政治 わが道』二～三頁、三八～四一頁。
- (44) 同右、二五六～二五八頁、松本明男『財界司令塔の興亡』東洋経済新報社、一九九五年、八四～八七頁。二〇〇二年には経団連と日経連が統合し日本経済団体連合会が成立する。
- (45) 同右、一〇～一一頁、四〇頁、藤山愛一郎『藤山愛一郎政治談話録音 速記録』一九二〇頁。
- (46) 藤山愛一郎『政治 わが道』一〇～一一頁、松浦正孝『ビジネス・財界と政権のあいだ』。
- (47) 藤山愛一郎『藤山愛一郎政治談話録音 速記録』二二～二三頁、三三～三七頁。

- (48) 同右、三八頁。
- (49) 同右、二二頁。
- (50) 藤山愛一郎『政治 わが道』三〇～三三頁。
- (51) 藤山愛一郎『日本の百人全集Ⅰ 私が行き方』学風書院、一九五九年、一五二～一七四頁。
- (52) 藤山愛一郎『藤山愛一郎政治談話録音 速記録』二五頁。
- (53) 「保守合同をめぐる財界人」『実業之世界』一九五五年九月一日号。
- (54) 藤山愛一郎『政治 わが道』三四～三五頁。
- (55) 藤山愛一郎「私はかく希望す(保守新党に対して)」『実業之世界』一九五五年七月一五〇日号、同「保守合同で政局安定・施策の一貫を計れ」『実業之世界』一九五五年九月一日号。
- (56) 「保守合同をめぐる財界人」、松浦正孝「ビジネス・財界と政権のあいだ」。
- (57) 藤山愛一郎『藤山愛一郎政治談話録音 速記録』九一～九二頁。
- (58) 藤山愛一郎『政治 わが道』四九～五一頁。
- (59) 吉川洋子『日比賠償外交交渉の研究』八四～九一頁。
- (60) 同右、第五～七章。
- (61) 同右、三三七～三四二頁。
- (62) 同右、一四七～一五二頁。
- (63) 藤山愛一郎『政治 わが道』四九～五五頁。
- (64) フイリピンとの賠償問題を解決した藤山は、鳩山首相から初代大使の人選を依頼され、洪沢敬三を説得したところ、別ルートですでに鳩山首相と重光外相が朝海浩一郎に決めたと聞かされた。このため、それまで財界の大勢に反して鳩山訪ソによる日ソ国交回復を支持して来た藤山は、人に依頼したことを忘れるほど健康が衰えている鳩山首相が日ソ交渉を担うのは無理だと判断し、石坂泰三経団連会長と共に財界を代表して岸幹事長を訪れ、鳩山訪ソ反対を申し入れたという(藤山愛一郎『政治 わが道』五三～五五頁、同「藤山愛一郎政治談話録音 速記録」二九～三三頁)。
- (65) 藤山愛一郎『政治 わが道』二～七頁。
- (66) 岸信介・矢次一夫・伊藤隆『岸信介の回想』文芸春秋、一九八二年、一八五～一八六頁。原彬久『岸信介——権勢の政治家』岩波書店、二〇〇三年、一五〇～一五一頁。
- (67) 藤山愛一郎『政治 わが道』八～一二頁。
- (68) 藤山愛一郎『日本の百人全集Ⅰ 私が行き方』一五二～一七四頁。
- (69) 藤山愛一郎『政治 わが道』五八～六三頁、同「藤山愛一郎政治談話録音 速記録」四一～五七頁、五九～六四頁。

- (70) 藤山愛一郎『政治 わが道』八〇～八六頁。
- (71) 同右、九三～九八頁。
- (72) 藤山愛一郎「藤山愛一郎政治談話録音 速記録」四二～四三頁。
- (73) 原彬久『岸信介』一八九～一九二頁。
- (74) 藤山愛一郎『政治 わが道』一〇九～一一三頁。
- (75) 同右、一一六～一二八頁。
- (76) 藤山愛一郎『政治 わが道』一四一～一四五頁、一九一頁。
- (77) 同右、一五三～一六三頁、藤山愛一郎「藤山愛一郎政治談話録音 速記録」八〇～八一頁。
- (78) 藤山愛一郎「藤山愛一郎政治談話録音 速記録」六六頁。
- (79) 植村甲午郎伝記編集室「人間・植村甲午郎——戦後経済発展の軌跡」サンケイ出版社、一九七九年、二九六～三〇三頁、六〇六～六〇七頁。
- (80) 藤山愛一郎『政治 わが道』一七二～一七七頁。
- (81) 同右、一六六頁。
- (82) 同右、一七八～一八三頁。
- (83) 同右、一九〇～一九六頁、安藤俊裕『政客列伝』二三八～二四八頁。
- (84) 安藤俊裕『政客列伝』二三五～二四四頁。
- (85) 藤山愛一郎『政治 わが道』一七二～二三〇頁、藤山愛一郎「藤山愛一郎政治談話録音 速記録」九〇～一〇〇頁、安藤俊裕『政客列伝』二三八～二四八頁。

### 三 水野成夫（一八九九～一九七二）と浪漫アジア主義

#### 共産主義からの転向

水野成夫は、一八九九（明治三二）年、静岡県小笠郡佐倉村佐倉に豪農の三男として生まれた。生まれてすぐに遠縁の貧しい家に里子に出され、そこで養母の溺愛を受けて育てられたが、六歳の時実家に戻り、「お坊ちゃん」として驕慢に育った。この複雑な育ちが、後の水野の激しい性格と波乱に満ちた人生に影を落としたと言われている。<sup>(86)</sup> 静岡中学、第一高等学校から一九二二（大正一一）年東京帝国大学法学部仏法科に入学し、翌年新人会入り

した。二四年大学卒業後、ヴ・ナロウド運動実践のため神戸・大阪へ行き、印刷工やうどん屋などを経て、東京毎日新聞社に入社し、二六年には産業労働調査所に入所、さらに共産党に入党した。そして二七（昭和二）年二月初め、上海のコミンテルン極東事務局に日本共産党代表として赴いた。ところが乗船時に警察の尋問に遭って党からの信任状を飲み下したため、上海に上陸したものの、コミンテルン極東事務局長ポイチンスキーの信認を得ることができなかった。現地視察に日を送るうちに、四月には蒋介石の四・一二反共クーデターに遭遇して漢口に逃げ込み、五月末に帰国している。この間上海・漢口で水野が共産党員として何をしたかについて、公安資料は「当初の任務について何らなすこともなく」と記し、水野自身もその後語ることはなかったため、中国共産党指導者の李立三と会ったこと程度しかわかっていない。

水野の親友であった詩人浅野晃によれば、水野が日本共産党員として一九二七年二月に上海入りした際にコミンテルン極東事務局長だったポイチンスキーらロシア人は高圧的で、中国共産党幹部から憎まれていた。中共幹部らは、「今にみている、奴らをみんなたたき出してやるから。そのときいっしょに手をつないでやろう」と水野に言っていたという。<sup>(87)</sup> こうして上海や武漢で活動するうちに、水野は内心コミンテルンの動向に疑問を感じ始め、<sup>(88)</sup> 国家・党派の目的のためには手段を選ばないコミンテルンの方針はヒューマニズムと相容れないと痛感し、それが後の転向につながったとされている。

帰国して、創刊された党機関紙『赤旗』の編集長を務めた後、二八年に三・一五事件で検挙された水野は、佐野学・鍋山貞親らの転向をもたらした東京地裁検事局の思想検事平田勲の下で、党友の浅野晃や南喜一らと共に転向する。<sup>(89)</sup> 獄中転向を行い、日本共産党に解党を求めて党を除名された。そして、出獄して三〇年に日本共産党労働者派を掲げて分派活動をした後、水野は三五年検事局に自首して執行猶予となり、マルクス・レーニン主義を完全に放棄した。<sup>(90)</sup> 水野と相互の転向に影響を与え合った浅野晃は、岡倉天心の英書を翻訳することでマルクス主義と訣別

しており、生涯の盟友であった水野にも、岡倉天心について浅野晃の解釈による影響があったことが推測される。<sup>(91)</sup>

近年の岡倉天心研究によれば、水野が運命を共にした浅野晃こそは、「大アジア主義の先覚者」という通俗的な岡倉天心（覚三）像を確立した人物である。彼は、転向後「天心狂」と言われるほど岡倉研究に没頭し、岡倉の「東洋の理想」「日本の覚醒」「東洋の覚醒」を翻訳・刊行し、膨大な量の岡倉論を発表した。浅野がいなければ、一九三〇年代後半以降の「天心ブーム」もなければ、岡倉が「東洋の理想」の冒頭に英語で一度だけ書いた「アジアは一つ」が「大東亜戦争」を正当化するスローガンになることもなかったという。<sup>(92)</sup> “Asia is one.” はベンガル地方の独立運動家を鼓舞するために岡倉が英語で唱えた言葉であったが、これを浅野は、日本人が「全東洋を抑圧する英国帝国主義」から東洋を解放するための「予言」として位置づけ直し、岡倉を賛美すべきイデオログへと仕立て上げたのだという。<sup>(92)</sup> そもそも岡倉天心という名前自体、岡倉没後に彼を戦時下の大東亜共栄圏の先覚者として祀り上げるために付けられたものであることを強調した木下長宏は、浅野こそ、「アジア主義」を唱えることも「日本精神」樹立を呼びかけることもなかった岡倉覚三を、「大アジア主義者」岡倉天心へと読み替えるという虚構を組み立てた人物であると指摘している。<sup>(93)</sup> この他、人物事典の中でも浅野晃は、転向後保田輿重郎らの「日本浪漫派」に参加し、「終戦まで過激な民族主義的評論家として活躍」したと紹介されている。<sup>(94)</sup> 水野成夫が天皇制の問題を、マルクス主義ではなく民族主義の方程式で解くことで転向を導いたのも、浅野のこうした再解釈と連動したものであったと考えられる。

政治活動から足を洗った水野は、もともとフランス語を学びたくて東京帝大フランス法科に入学したこともあり、学生時代から始めていたアナトール・フランス、アラン、アンドレ・モーロアなどの翻訳で生計を立て、成功した。<sup>(96)</sup> 三八年に知り合い意気投合した文士尾崎士郎との関係はその後も続き、尾崎は水野の世間への売り込みに大いに貢献した。水野はそれ以外にも、尾崎一雄、小林一三を始めとして文芸界に多くの知己と支援者を持ち、文化

人としての水野の一面は、後の放送文化事業への進出や財界人としての活躍に大きく寄与した。特に、社会主義経験を共有し親分肌でもある尾崎士郎とは、任侠的関係において共通点があり、偶然性が大きな役割を果たす人間関係の構築において、「友人教の教祖になりたい」という水野は、心酔する尾崎から多くを学んだという。<sup>(97)</sup> 水野にアジア主義的要素があるとするれば、共産党活動・転向などを共にした友人浅野晃から得た浪漫的アジア主義や、西洋的な理論思考からではなく「会う」ことで紐帯の実感や共同幻想を得るアジア主義の人間関係などであったと言える。共産主義から転向した結果、ソ連主導のマルクス主義に対する反感を抱いていたことも、それらは関係していたように思われる。

そして水野は、共に転向したもう一人の同志である南喜一の縁で、陸軍省軍務局軍事課の岩畔豪雄中佐の立案する総合国策十年計画のパルプ自給及び再生紙事業に巻き込まれ、宮島清次郎日清紡績社長が経営する国策パルプの出資先である大日本再生製紙常務に就任することとなった。<sup>(98)</sup> ここで知り合った岩畔大佐が一九四二年から南方軍総司令部付のインド独立協力機関（岩畔機関）長となると、岩畔の依頼で水野は一月から翌年七月までシンガポールに渡り、東南アジアに散らばるインド人を集めて行ったインド独立運動に参与したという。<sup>(99)</sup> 英国の東南アジア植民地支配は、公共事業の建設労働者、政府事務員、警官、兵士、水夫、門番、プランテーション労働者、植民地貿易の商人など、あらゆる側面でインド人に大きく依存し、英国・インド・中国の三角貿易もインド人によって支えられていたために、ラース・ビハーリー・ポースら亡命インド人を利用した陸軍の対インド工作は、アジア各地域に住むインド人に向けて行われたのである。<sup>(100)</sup> 水野がここで具体的にどのような働きをしたのかは明らかでないが、共産党での活動経験が買われて、占領地域住民の宣伝謀略や宣撫工作にあたっていたと言われている。<sup>(101)</sup> 但し、上海・漢口での華々しい武勇伝を想像できそうな活動歴同様、ここでも水野が実際何をしていたのかについては記録もなく全くのベールに包まれている。果たして何ほどのことができたのか、ただ想像力をかきたてるだけである。



戦後の水野成夫とアジアないしアジア主義とのかかわりについても、現在のところ目ぼしい資料を見つけることはできておらず、実際のところは残念ながら不明である。例えば、水野は大アジア主義者の下中彌三郎と親交があったため、一九六二年に下中記念財団の設立に関わり、その評議員となっている。<sup>(10)</sup>このことから、浅野晃の日本浪漫派とも共通するようなアジア主義的思想傾向を持っていたことは想像できるが、その事実は断片でしかない。

### 戦後財界に入る

水野が財界入りする契機は、友人南喜一によって引つ張りこまれた大日本再生製紙株式会社であった。三八年に設立された国策パルプの社長となった宮島清次郎日清紡社長が、四〇年大日本再生製紙に出資して設立するにあたり、共産党の活動歴がある水野と南を、それぞれ大日本再生製紙の常務、専務としたのである。<sup>(11)</sup>同社が四五年一月に国策パルプと合併するに至って、水野は国策パルプの常務となり、四八年専務、四九年副社長、五一年社長、六〇年会長となった。

戦後政治の一〇年間に常に政治の中心にあった吉田茂の経済面における指南役は、戦前からの財界の中心人物で、戦時中吉田の反東条内閣運動の同志であった池田成彬であった。しかし第三次吉田内閣組閣の頃から体力的にも衰え始めた池田に代わり、吉田の大学における同級生の宮島清次郎日本工業倶楽部理事長が吉田の相談役となった。そして宮島と、宮島の日清紡における後継者である桜田武、日清紡を傘下に置いた根津財閥の総帥根津嘉一郎が社長を務める富国徴兵保険に入り社長となった小林中、桜田と同郷で六高・東大を通じて柔道仲間の永野重雄に、水野成夫を加えたグループが、吉田やその片腕となった池田勇人を支えるようになった。よく知られるように、大蔵事務次官を辞めて衆議院に出馬し初当選したばかりの池田勇人を、宮島に蔵相候補として推薦したのは、池田と同郷の桜田武であった。宮島の推薦により吉田が即断したために池田は蔵相に就任し、党内の反対で困難に

直面しながらもドッジ・ラインの下で均衡財政を実現していく中で、池田は吉田の信頼を勝ち取り、その後継者として浮上して行った。<sup>(104)</sup> 主税畑を歩んできた池田は国税課長時代に、根津嘉一郎の遺産整理にあたっていた小林中と親交を結び、大日本再生製紙常務の水野とも出会って交友を深めた。<sup>(105)</sup> 池田の蔵相時代、小林、桜田、水野らは池田と同年生まれであることから、池田を囲む二黒会を作って池田の側近としての地位を固めた。特に水野は、再生紙事業に関わって以来恩顧を受けた宮島清次郎を通じて、吉田茂、松永安左衛門、小林一三といつた理解者を獲得し、さらに池田勇人との関係もあって、小林・桜田・永野と共に「財界四天王」と呼ばれるまでになったのである。<sup>(106)</sup>

財界で特に水野が重用されるようになったのは、宮島清次郎日本工業倶楽部理事長の下、一九四六(昭和二二)年の経済同友会と経済団体連合会(経団連)の立ち上げに際し、実質的な中心として動いたことが大きい。この時水野自身は、共産党員としての前歴があるために表には出ない形で、戦時中知り合った陸軍主計将校で日本電子工業常務の鹿内信隆を使った。<sup>(107)</sup> また、水野は、文化人としての顔と、共産主義から転向した反共主義者としての顔を持ち、「財界のマスコミ対策部長」と呼ばれた。

血のメーデー事件に見られる共産党主導の活動が高揚し、労働争議が激化する中、一九五二年に開局し経営が悪化していたラジオ局文化放送の労働組合が戦闘的になった。文化放送が革新勢力の傘下に入るといふ危惧も出てきたため、桜田武ら日経連を中心として打開策が講じられ、文化人で財界人でもある渋谷敬三と水野成夫を、それぞれ会長、社長とする形で、財界と出版界が新たに投資して再建することとなったのである。水野は経営を建て直す一方、「共産党時代の俺は、組織、煽動、宣伝に就いては鳴らしたもんだ」と自ら語って労働組合対策の腕前をふり、<sup>(108)</sup> 労働組合を切り崩すことに成功した。さらに五七年には文化放送とニッポン放送の出資により富士テレビジョン(翌年フジテレビジョンと改称)を創立して社長に就任し、五八年前田久吉から産業経済新聞社を買収して社長

となった。<sup>(11)</sup> よく知られるように、水野は産経新聞の赤字を一年で黒字に転換すると同時に、「産経残酷物語」と言われるような過酷な組合対策を断行した。

財界における水野の声望は、共産党闘士としての経験を生かした反共主義による労組操縦法や人心収攬術にあったと言われる。彼は普段から「家来」という言葉を好んで使うと共に、「友人教教主」とも呼ばれ、情に厚く人間心理の機微をつかんで築いた豊富な人脈を誇り、人を使うことに常に強い関心を持っていたという。<sup>(12)</sup> 同じく共産党からの転向者であった鍋山貞親は水野成夫論の中で、「実践においては、共産党とはげしく争っているのに、ふと気がつく」と頭にある思考方法は、旧にかわらぬ共産主義のそれから一歩もでないのである」と述べ、<sup>(13)</sup> 共産党活動家として形成された人間関係の結び方や操作術は、転向して反共主義者となっても変わらないと指摘した。水野は、共産党時代も、反共主義時代も、一貫して極めて党派的であり政治的であったと言うことができよう。彼は、経済同友会で労働運動対策を担当したが、社会主義や共産主義は権力維持のための主義であって労働者の福祉を害するものであると、経験に基く主張を展開し、経営者らがまだ理解していなかった共産主義や労使のあり方について経営者たちに大きな影響を与えたと、<sup>(14)</sup> 桜田武や元経済同友会代表幹事だった東海林武雄らは語っている。<sup>(15)</sup>

### 財界のアジア政策への影響

上述したような水野の反共主義は、転向者に典型的なものであったと共に、共産主義・社会主義の権力中枢に対する反発から出たものでもあった。水野の対アジア政策の特徴は、次のような形で、日本の財界団体に影響を与えている。

例えば水野は、日中国交回復の際に、中国の本質はソ連の共産主義とは異なるものだとして、脱イデオロギー的に観察していた。一九六六年一月、経済同友会を中心とする日本経済人訪中団（団長は東海林武雄日本航空機製造

社長だが、顧問に同友会代表幹事の木川田一隆東電会長と永野重雄は香港経由で北京を訪問し、周恩来総理と会見、日中国交回復の道をつけた。その伏線となったのは、かつて日本共産党代表として上海に渡り活動した水野成夫が、中国とソ連は一枚岩ではあり得ず、漢民族はソ連を利用してきているのだとして、経済同友会でビジネス抜きの中団を送ることを、それ以前から熱心に主張してきたことであつた。それは、当時河合良成が提唱した貿易促進のための訪中団計画とは、一線を画していたといふ。<sup>(16)</sup>

その一方で水野は、日本浪漫派としての幻想的なアジア主義の側面も持ち合わせていた。一九七〇年頃、経済同友会では、北裏喜一郎対外政策委員長（野村證券社長）を中心に、それまでの日本企業による東南アジアにおける経済活動のあり方を反省し、七三年に東南アジアの民間経済人や中国との交流を深め、投資や開発援助を行うべく準備を進めることとし、七四年以降東南アジア経営者会議を開催するようになった。<sup>(17)</sup> 経済同友会の事務局を務めていた山下静一によれば、アセアンとの交流が生まれた背景には、水野の影響があつた。水野が戦前の中国、戦中の東南アジアにおける経験から「アジア人としての目覚め」を得て、岡倉天心の「アジアは一つ」という言葉を信奉し、同友会の若い世代が東南アジアの同世代と交流するよう熱心に説いていたことが、財界に大きな影響を与えたのだといふ。<sup>(18)</sup>

財界におけるマスコミ部長として、あるいは労働組合対策のエキスパートとして、反共主義・反組合活動の急先鋒であつた水野が、中国共産党の支配する大陸中国とのビジネスを始めとする交流を推進しようとしたことは、一見不思議に見える。しかしながら、戦前以来、水野が敵意を持ってきたのはコミンテルンやソ連共産党であつて、ビジネスの対象としての中国の市場や民衆、漢民族、さらには中国共産党に対しても、連帯の可能性を感じていたことは十分考えられる。残念ながら管見の限り、村田省蔵や藤山愛一郎のように、戦後の水野が自ら中国を始めとするアジアに赴いて積極的な活動をしたという具体的な記録はないが、水野が浪漫的・文学的なアジア主義の伝道

者としての立場から、ビジネスにおいても中国との提携の可能性があると直観的に推測した可能性はあるように思われる。

なお別稿で分析したように、吉田茂は村田省蔵に、華僑を媒介とする対中国工作論を語った<sup>(19)</sup>。吉田の構想は、中西寛が的確にまとめたように、米英日の協調によって中国をソ連陣営から離脱させるために、積極的な働きかけ（逆浸透）を図ることにあつた<sup>(20)</sup>。ここで紹介した水野成夫の対中接近論も、東南アジア華僑をその経路としており、吉田の対中逆浸透論とよく似ているが、そこに、吉田と水野との相互の影響を見ることは、不自然ではないように思われる。実は水野は、一九三八年暮れから四〇年春にかけて、共産党時代の同志であつた満鉄調査部の石堂清倫が企画した全一二巻の「アジア問題講座」を尾崎秀実と共に編集し、自らも華僑論の一章を執筆していた<sup>(21)</sup>。東南アジアの華僑を「支那と欧米民主主義国家群とをつなぐ紐帯の一つ」と見なし、日本の南進や東亜新秩序建設の一環として重視しなければならぬという平凡な結論に終わるこの論文は、当時刊行されていた台湾総督府や台湾銀行などによる華僑調査研究の水準から考えると、それほど現地の事情を研究した独自のものとは言えないように思われる。しかし水野の南洋華僑論は、戦前数か月間の上海・漢口時代に確信となつた中ソ対立への予感と共に、戦後の水野の対中接近論につながる中核的な論点であつた。

水野の対中提携論は、村田省蔵の徹底した中国現地や中国民衆への浸透と密着の経験から得られた実業アジア主義とも、濃密な血縁・遠戚・先輩関係などを媒介とした蒋介石・周恩来などの直接対面による選良アジア主義とも異なる。水野にアジア主義があつたとすれば、それは、戦前の共産活動で得た共産主義への違和感に基づく反共主義という党派的要素と、「アジアは一つ」という言説に見られるような文学的・浪漫的な要素とから成り立っていた。それ故にそれは、村田とも、藤山のような反吉田陣営ともつながるようなものではなく、宮島清次郎を通じて党派的に連なつた吉田茂と、対アジア政策においても反共主義においても、びたりと重なり合うものであつた。

- (86) 水野成夫伝記編集室『人間・水野成夫』サンケイ新聞社出版局、一九七三年、第一章・第二章。
- (87) 境政郎『水野成夫の時代——社会運動の闘士がフジサンケイグループを創るまで』産経新聞出版、二〇一二年、一〇〇～一七頁、五五四～五五五頁。
- (88) 同右、一八～二〇頁、一七〇～一七三頁、二二七頁。
- (89) 同右、二三〇～二七二頁。
- (90) 同右、二〇〇～二六六頁。
- (91) 同右、二六四～二六五頁。
- (92) 例えば、廣瀬陽一『日本主義』という虚構——浅野晃の転向を手がかりに』名古屋大学『国語国文学』一〇三号、二〇一〇年。浅野晃や保田興重郎らの「日本浪漫派」については、竹内好「近代の超克」竹内好『竹内好全集』第八卷、筑摩書房、一九八〇年、を参照。
- (93) 木下長宏『岡倉覚三——物二観ズレバ竟ニ吾無シ』ミネルヴァ書房、二〇〇五年、二四一～二八七頁。
- (94) 朝日新聞社編『現代日本 朝日人物事典』朝日新聞社、一九九〇年。
- (95) 廣瀬陽一「転向と同化…協和事業を手がかりに」大阪府立大学『人間科学研究集録』二〇一二年七月。
- (96) 境政郎『水野成夫の時代』二七四～二八四頁。
- (97) 同右、二九七～三〇三頁。
- (98) 境政郎『水野成夫の時代』三〇六～三一八頁。
- (99) 同右、三一八～三二六頁。
- (100) 松浦正孝『大東亜戦争』はなぜ起きたのか』二六五～二六九頁。
- (101) 水野成夫伝記編集室『人間・水野成夫』三〇四～三〇七頁、三二〇～三二二頁。
- (102) 下中弥三郎伝行会『下中弥三郎事典』平凡社、一九六五年、一五一～一五三頁。
- (103) 宮島清次郎翁伝行会『宮島清次郎翁伝』同、一九六五年、四一八～四三五頁。
- (104) 藤井信幸『池田勇人——所得倍増でいくんだ』ミネルヴァ書房、二〇一二年、五一～一三四頁。
- (105) 同右、二七頁。
- (106) 同右、一七三～一七五頁。
- (107) 小林一三・水野成夫「対談 喰へる日本」『文藝春秋』一九五一年一〇月号。
- (108) 境政郎『水野成夫の時代』三五一～三七四頁。
- (109) 同右、三四八～三五二頁。福本邦雄『表舞台裏舞台』二四四～二五七頁。
- (110) 岡本功司『永福柳軒という男——虚説・水野成夫伝』同盟通信社、一九六二年、二〇〇～二〇二頁。

- (11) 境政郎『水野成夫の時代』第八章。
- (12) 岡本功司『永福柳軒という男』三三三～三四頁。
- (13) 尾崎士郎・水野成夫・北島織衛「鼎談 人の上手な使い方」『実業之日本』一九五〇年一〇月号、山下剛『財界四天王 保守本流を支えた財界人脈』ばる出版、一九八五年、第二章。
- (14) 鍋山貞親「水野成夫論に触発されて」『論争』一九六二年一月号。なお、水野には、秘密会と投書密告、「干す」戦術などによってサンケイ新聞社内に独裁的権力を確立したという記事(河野達之助「凋落する水野成夫株」『論争』一九六二年三月号)もあり、読売新聞会長・主筆の渡辺恒雄が、共産党細胞時代の経験を生かしたフランクシヨン戦術・異端排除・敵罰主義などの人間操作術で読売新聞社内を掌握した(魚住昭「渡邊恒雄 メディアと権力」講談社、二〇〇〇年)と指摘されているのと合わせ、興味深い。
- (15) 水野成夫伝記編集室『人間・水野成夫』三三二～三三三頁。
- (16) 山下静一「戦後経営者の群像——私の「経済同友会」史」日本経済新聞社、一九九二年、一一七～一二三頁。
- (17) 経済同友会『戦後経営者の群像——私の「経済同友会」史』一九七六年、七二～七三七頁。
- (18) 山下静一「戦後経営者の群像」一一八～一二二頁。
- (19) 松浦正孝「財界人の戦前と戦後のあいだ」。
- (20) 中西寛「吉田茂のアジア観——近代日本外交のアポリアの構造」『国際政治』一五一号、二〇〇八年、二七～三〇頁。井上正也「吉田茂の「逆浸透」構想」同右所収、も参照。
- (21) 矢部良策『アジア問題講座第五卷——経済・産業篇(二)』創元社、一九四〇年。
- (22) 濱下武志「華僑・華人調査——経済力調査・日貨排斥・抗日運動調査」末廣昭編『岩波講座「帝国」日本の学知 第六卷 地域研究としてのアジア』岩波書店、二〇〇六年。

## おわりに

本稿では、アジア主義の「会う」という契機を中心に、戦前から戦後にかけて政治経済に重要な役割を果たした三人の軌跡を分析したが、三人ともそれぞれに特徴的なアジア主義を一貫して持っていた。村田省蔵は中国における十年近い現地に沈潜したビジネスを通じて、また戦後は周恩来と会うことで、「アジア」の存在を確信した。彼



が満洲事変以後加わった大亜細亞協會や反英運動と、戦後の日中国交回復への努力とは、実業アジア主義という点で実は軌を一にするものである。藤山愛一郎は蒋介石や孔祥熙らと直接会い、父藤山雷太や岳父結城豊太郎、畏敬する先達である洪沢栄一と共通のネットワークに属していることを実感し、戦後は周恩来との会見などを通じて高碕達之助や松村謙三らと親中国派のネットワークを形成し、日中国交回復にのめり込んだ。水野の場合は、家父長制的な家庭環境や、「友人教教祖」と言われる浪花節的な人間関係や党派性、共産活動以来の同志浅野晃が転向にあたり打ち立てた浪漫主義的幻想が、生涯を通じてそのアジア主義を実感する根拠となっていた。

一方、西洋的なものに対する反発は、三人ともに共通している。村田の場合は、主に英国資本との競争・角逐を通じて、実業アジア主義が形成された。藤山にとつて戦後の日米安全保障条約改定は、占領下の不平等条約改正という、戦後の米国支配に対する一種の反発の側面を持っていた。水野の場合には、青年期にのめり込んだ共産主義への反発・攻撃がその後の人生を彩ったが、それはコミンテルンの支配するマルクス主義という、日本人・中国人を括る東洋人種という枠から、あるいは日本の天皇制やイエ制度から見れば、西洋由来の外來思想に対する反発でもあった。

いずれも、日本を起点として、「アジア」という概念を使い、西洋的なものを競争・抗争・排除の対象とし、「アジア」と考える範囲の中での連帯を求めたという点において、アジア主義者であったと言うことができよう。そのことを通じて三人は、戦後の政治経済体制を形成する過程においても重要な役割を果たした。今後、他のキー・パーソンについての同様の分析と総合を重ねることで、戦後日本の履歴を論じる手がかりを豊かにしていきたい。